

別紙1-1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号
------	---------

氏 名 田口 恵也

論 文 題 目

向社会的な嘘の個人間機能と個人内機能

論文審査担当者

主 査

名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授	溝川 藍
名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授	高井 次郎
名古屋大学心の発達支援研究実践センター教授	金子 一史
名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授	山形 伸二

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

「オオカミ少年」や「金の斧」の寓話、「嘘つきは泥棒の始まり」という諺が象徴するように、人は嘘をつくことを避けるべき行為として捉えている。しかし、嘘をはじめとする他者を欺く行為は日常の中で観察される。これは、嘘が円滑な社会生活を送る上で役立つ機能を備えているためであると考えられる。先行研究からは、嘘の中でも、他者のためにつく向社会的な嘘は、対人関係を円滑にする社会的潤滑油としての機能を有していることが指摘されてきた。

しかし、先行研究には、①主に発言者と被発言者の二者関係の間での向社会的な嘘の機能を想定しており、向社会的な嘘が周囲を取り巻く人々との間でどのように機能するのかは十分には検討されていないこと、②対人関係の良好さのような、向社会的な嘘の個人間機能については検討されてきたものの、精神的健康のような個人内機能については明らかにされていないこと、③向社会的な嘘の機能を検討する際に対人関係の性質について考慮されていないことという3つの大きな問題点があった。本論文では、向社会的な嘘が持つ個人間機能と個人内機能を明らかにするために、大学生を対象とした研究（研究1～5）と中学生・高校生を対象とした研究（研究6）を実施し、個人間機能については、周囲の第三者の評価の観点から、個人内機能については、発言者の精神的健康の観点から検討を行った。

第1章では、向社会的な嘘に関する先行知見をまとめ、向社会的な嘘の機能に関する理論的背景を整理し、先行研究における課題と本論文の目的を示した。

第2章では、3つの研究を通して、周囲の第三者の評価の観点から向社会的な嘘の個人間機能について検討を行った。研究1では、嘘をつく動機が嘘に対する評価に及ぼす影響について検討を行った。その結果、嘘をつく人は真実を伝える人と比べて正直さが低いと評価される一方で、向社会的な嘘をつく人は、利己的な嘘をつく人より思いやりが高いと評価されることが示された。研究1から、向社会的な嘘が利己的な嘘より肯定的に評価されることが確認された。研究2では、向社会的な嘘を、積極的に事実とは異なることを伝える偽装と事実を伝えない隠蔽に分類し、第三者からの評価の違いについて検討した。その結果、偽装は、隠蔽や他者に不利益のある真実より道徳的で許容できると評価されることが示された。研究3では、向社会的な嘘を、発言者の利益の有無によって分類し、第三者からの評価の違いについて検討した。その結果、発言者の自己利益を含まない向社会的な嘘は、自己利益を含む相互利益的な嘘と比べて肯定的に評価されることが示された。このことから、自己利益を伴うことで、他者のためにつく嘘に対する第三者の評価が損なわれる可能性が示唆された。また、一部の評価については、他者に不利益のある真実が向社会的な嘘や相互利益的な嘘より肯定的に評価された。さらに、この結果は、評価者の嘘をつくことに対する否定的認識の高低に関わらず一貫していた。

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

研究 1, 研究 2, 研究 3 から, 向社会的な嘘は, 第三者によって肯定的に評価されるものであり, 円滑な対人関係の構築・維持に値する人物であることを周囲に伝えるシグナルとして機能することが明らかになった。研究 2, 研究 3 の結果は, 事実を伝えない隠蔽よりも, 事実と異なる情報を伝える偽装の方が肯定的に評価されること, また, 動機に自己利益を含む相互利益的な嘘よりも, 自己利益を含まない向社会的な嘘の方が肯定的に評価されることを示すものであった。ここから, 特に向社会的な意図が第三者にとって明確である場合に, 向社会的な嘘は第三者との関係を良好にする可能性が示唆された。その反面で, 真実を伝えることによって他者が傷つくとしても, 向社会的な嘘をつくことよりも真実を伝えることの方が好ましく評価される場合があることも確認された。以上より, 向社会的な嘘は常に肯定的に評価されるわけではなく, 状況を問わず利用した場合にはかえって対人関係の悪化を引き起こす可能性のある諸刃の剣であることが示唆された。

第 3 章では, 向社会的な嘘が持つ個人内機能について明らかにするために, 大学生を対象に向社会的な嘘と抑うつとの関連およびその過程についての検討を行った。研究 4 では, 嘘の使用傾向と抑うつとの関連について検討した。その結果, 向社会的な嘘は, 友人関係を良好にすることで抑うつを低下させるものの, 友人関係の良好さを統制した場合には, 向社会的な嘘を用いているほど抑うつが高くなることが明らかになった。研究 5 では, 向社会的な嘘の使用が抑うつを高める要因として対人疲労感に着目し, 向社会的な嘘と抑うつとの関連の過程について検討した。研究 4 と同様に, 向社会的な嘘は友人関係を良好にすることで抑うつを低下させること, 向社会的な嘘を用いているほど抑うつが高くなることが明らかになった。しかし, 向社会的な嘘と対人疲労感の間に関連が見られず, 大学生においては, 向社会的な嘘が抑うつを生起させるのは, 対人疲労感以外の要因によることが示唆された。

第 4 章では, 研究 6 を実施し, 中高生を対象に向社会的な嘘の使用と抑うつとの関連およびその過程について検討した。また, 向社会的な嘘の使用傾向の発達差についても検討を行った。その結果, 大学生と同様に, 中高生においても向社会的な嘘を用いているほど抑うつが高くなることが明らかになった。さらに, 向社会的な嘘の使用と抑うつが関連する過程については, 大学生とは異なる結果が得られた。まず, 中学生では向社会的な嘘が友人関係の良好さの低減を介して抑うつと正に関連したが, 高校生では向社会的な嘘と友人関係の良好さに関連が見られなかった。その一方で, 中学生と高校生のどちらにおいても向社会的な嘘が対人疲労感を高め, 抑うつと正に関連することが示された。なお, 中学生と高校生の間で向社会的な嘘の使用傾向の違いは見られなかった。

研究 4, 研究 5, 研究 6 から, 向社会的な嘘の使用は, 対人関係を良好にする適

別紙 1-2

論文審査の結果の要旨

応的な機能だけではなく、抑うつを高める非適応的な機能を併せ持つこと、この非適応的な機能は青年期において一貫していることが示された。これらの結果から、向社会的な嘘に依存したコミュニケーションは、少なくとも青年期においては個人の内的適応に悪影響を及ぼす可能性が示唆された。また、向社会的な嘘が抑うつと関連する過程については、学校段階による違いがあることも明らかになった。中学生では向社会的な嘘の使用が友人関係を悪化させ、対人疲労感を生起させるものの、その後、高校生、大学生と、学校段階が上がるにつれて、向社会的な嘘の使用は友人関係を良好にし、対人疲労感は生起しなくなることが示された。

第5章では、6つの研究に関する総合考察を行い、今後の課題と展望を述べた。

嘘に関する心理学の先行研究からは、向社会的な嘘が、発言者と被発言者の二者関係を円滑にする個人間機能を持つことが示されてきた。本論文の知見によって、新たに、向社会的な嘘が、二者関係だけでなく周囲を取り巻く人々との関係をも良好にする可能性を持つことが示された。向社会的な嘘の個人間機能に関する知見を拡張した点で、本論文の学術的な意義は大きい。さらに、向社会的な嘘の個人内機能にも着目し、向社会的な嘘の使用が人間関係を円滑にする一方で、個人の抑うつを高めるという非適応的な機能を併せ持つことを新たに明らかにしたことも本論文の重要な成果であり、その独自性と学問的貢献は高く評価することができる。

本論文に対して、審査委員は慎重に審議を行い、次のような指摘がなされた。

- (1) 心理学領域の先行研究だけでなく、コミュニケーション学領域や社会言語学領域など、他の関連領域の理論や先行知見を広くふまえて研究を行うとよい。
- (2) 嘘の言語的な側面だけでなく、非言語的な側面にも焦点を当て、実験的な手法による検討を行う必要があるのではないか。
- (3) 本論文では、嘘と真実を明確に区別しているが、現実生活では、嘘と嘘でないことの境界は、嘘のつき手本人にとっても曖昧である。研究と現実の乖離をどのように減らすかが課題となる。
- (4) 本論文では、嘘を「意図的に相手をだますような、真実ではない言語的陳述」と定義している。しかし、嘘のひとつに含められている隠蔽は、事実を伝えない方略であり、位置づけがわかりにくい。
- (5) 相手との関係性とは独立に自己利益を志向する嘘、相手との関係調整の結果として自己利己を得る嘘、相手との関係性とは独立に純粹に他者利益を志向する嘘を切り分けて整理する必要がある。
- (6) 研究2で扱っている偽装と隠蔽について、本当に向社会的な意図があると言えるのか。

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

- (7) 本論文中で使用された既存の尺度の一部については、各研究の目的に照らし合わせると、他により適切な指標があった可能性が考えられる。
- (8) 各研究に内的妥当性にかかわる問題が多く存在するため、本論文全体としての明確な結論を導くことが難しいのではないかと。

指摘された問題はいずれも重要なものであるが、学位申請者の今後の研究によって補われ得るものであり、本論文で示された新しい知見の本質的な価値を損なうものではない。また、学位申請者は、これらの問題点や今後の課題について十分に認識しており、質疑に対する応答も適切なものであった。以上を総合して、本論文は新たな学問的視点と知見を提供するものと認められた。

よって、審査委員は全員一致して、本論文を博士（心理学）の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。

以上